

敗北的自殺でなく

死を賭けた生き様として

仲場保

コーチヤンが死んでから一カ月が過ぎよう
としています。彼の死に随ともなひでも比や巨らと
とりみじし、動転してしまつた私に比べ、沖
繩で、東京で、北海道でそして全国で、名も
知らぬ人達が彼の意志を継ぎ、身をもつて戦
いに決意していきました。彼にとって最大の
手向けの言葉は、事実行為でもつて死者との
連帯を示してゆくことであると考えます。
当初、新聞などで彼の死についてあれこれ
と勝手な見解が出されました。へ弒立して
へ逃亡につかれてへあるいはへ皇太子の暗殺
を企て、挫折しと、彼をよく知つてゐる者に
いつて、これほど死者をバカにし、ふみつけ
にした言葉はなく、その怒りはどうていおさ
えることができませんでした。私の知つてい
るコーチヤンは決して弱気になつて自殺する

人間ではなく、どんな人に対しても、
 まぼとマジメに接し、それでいて人間の弱さ
 について知つてゐる人でした。立派とか、英
 雄的という言葉は似つかわしくなくむしろ、
 仲間からは「男」であり、仕事上の「先輩」
 であり、会えばいつも酒屋にさぞつてくれた
 ことを想い出します。彼の死がこのようなあ
 りまつた形で伝えられることにはガマンでき
 ません。

が、自分の死に対してはおどろくほど神経質になり必死になつて生きのびようとする。どんなワルでも生きてゐる間に社会的地位があれば国民葬にしたり、勲章をいただいたりできるのだ。かつて野たれ死にした仲間はまだにも葬式をやつていただいたり、墓に入れられたりしただろうか。切りぎざまれて、大学病院に死られるのおであつた。死者になつても暗殺はついて回るのだ。コーチヤンの死は、彼自身が示した犠牲者としての生と死として語られるのではなく、仲間から切りはなしへ過激派の死として追憶され、二重に抹殺されるようとしている。資本主義制度における死は、タタミの上の往生か、さもなくは野たれ死にとしてあらわれる。市民社会の亡者供はいかにもタタミの上で死ぬのがあたり前と思つてゐるが、かつて仲間の死で、タタミの上で心残りなく死ねたものがあつただろうか。現場でレコして、あるいは本館で荷の下敷きとなり、路上であるいはドヤのベッドで一人

で死んでいった。仲間の死を見た時それは自分の死であり、死者は未来の自分であつた。コーチヤンは仲間たちに常々言つていた。「黙つてのたれ死ぬな、生きて奴らにやり返せ」ドヤのベッドで路上で病院で日々やられ続けてゆく仲間の死をムタにするなと。「いま生きてゐる者の利益によつて闘うのではなく、死んだ者の利益によつて闘うような闘いが必要なんだ」と、そして「闘わずして殺されるくらいなら闘つて死のうちはないか」という言葉を残して……資本家どもは、自分の死だけを恐れる。だからすべての死を個人としての片づけようとする。彼らにとつては死をも恐れぬ人間、平気で命を棄てる人間が理解できない。あいつは弱かつたんだとか、生きてゆく力がなかつたとか、評論して安心しようとする。

人民へなかまの持つ死の意味は結果としてこの死であり、よきタチの死は生前の生き生きとした記憶と共に、自分自身の死と重なつ

てしまう。死者と生をくみかわすことによつて、生き残つた者と死んだ者の思ひは重なつてゆく、俺たちは死んで仲間のところへ行くのだ。

彼（コーチヤン）の死に様々な生き様こそ、彼が直前に生きて証であり、彼こそは自らの死をへ戦場での死として生きぬいたのでと、言うことができる。コーチヤンは皆の仲間へ「黙つてのたれ死ぬな」という言葉を残した。彼の思ひは、仲間の中に生きてゐることを信じ、身をもつて抗議して死んだ。

戦場で死ぬ者は死んだのではなくて生きてゐる。いささか突飛に思ふかもしれませんが、世界中どここの国でもこういつた伝説があり、現に信じられています。南アメリカのインカのインディオの間では、魂は必ず肉体にもどつて来ると信じられ屍体はミイラとして保存されます。アフリカの解放闘争の戦士たちも又、戦士として勇ましく闘つて死んだ者は必



ず生きかえると思われています。大和と戦つたアイヌの戦士達は、どんな犠牲をばらうても仲間の屍体をとりかえしました。それに并し大和の支配者はアイヌの戦士達の胸と首を切り落したと云います。生き

返らせない為に。

コーチャンの死は、仲間のだれもが初め信じようとしなかった事ですが、それはきつと帰ってくることを信じていた為でした。仲間が集まり骨をわけてもらおうということになり、結果的に不可能になりましたが、今でも私は骨を分けてもらいたかったと思つています。骨だけはコーチャンそのもののなのですから。

コーチャンは生前、あらゆる形で自力の思いを語り、世界に与えた。しかし彼に返つてきたものはあまりにも少なかつたこと、私も又彼に十分にかえすことができなかったことが悔やまれます。私が彼に最後に会つた時、彼と一緒に煮込みうどんをつくり、すすつていた時に、彼の背中を男のさみしさみしいなものが包んでいたこと、「酒を飲まない」と願うがする」といつて酒をチビチビ飲みながらガリ版に向つていたコーチャン、そして私が

彼の為にできた事と云ふは、黙にはつてあつた彼の手配写真を一度破り棄てたこと。彼が死んでしまつた以上、生きてゐる彼にもはや借りはかえせない。

それどころかその借りは一生かかつてでも、かえしつくせない様な気がします。もしも私がその事を忘れてもしようものなら、彼は地獄からでもその償しを取り立てにやつてくるでしょう。

私の生きてゆく理由といへば彼が生きていた間にはたしえなかつた仕事を生涯かけてでも続けてゆく、ただ彼の思いを彼の愛り身となつてひきうけてゆくしかないのだという気がします。

ただ死者のみが生きてゐる者の闘いの方向をさし示すことが出来るのです。